

小学生の頃の思い出

土橋重治

国民学校一年生

昭和二十年(1945)四月、最後の国民学校入学生となった。一学期中は戦争中である。登校すると、まず中庭にあった天皇の御真影と教育勅語の謄本が奉安されている「奉安殿」に最敬礼してから教室に入る。

「空襲警報」が頻繁に発令された。発令されると学用品を素早くランドセルに詰めて、校門前に集合ごとに集合する。「粟第〇班集体完了出発します」と上級生が報告してから、高等科二年生(今の中二)を先頭に駆け足で下校する。一年生は最後尾で上級生のスピードについて走るのがいつも辛かった。

近視

黒板の字がみんなと同じように見えないことに初めて気付いたの

が、校地の南東端にあった暗い一年生の教室だった。

強度の近視(左弱視、右〇、一)という先天的ハンディキャップを負っていた。

小学校へ入学するまで、長兄によく「この子はどんくさいなあ」(何事も手早く出来ない)とはよく言われたが、自分としては特に不便を感じたこともなかった。今見えているこの世界が「こんなもんや」と思っていた。

教室は、今のように照明器具はついていなかった。黒板の下に高さ三十センチ、畳二帖分くらいの教壇がどの教室にもあった。

その教壇を机代わりに、床に正座して授業を受けることが三年生まで続いた。このハンディが後々の人生に大きくのしかかることになる。

戦災で全焼

終戦となる直前の昭和二十年七月九日、「和歌山空襲」の早朝、東隣の火が、突然風向きが変わって槇の木の生垣に燃え移って、アツという間に本屋・水屋・長家・倉庫、何もかも一瞬にして灰燼かいじんと帰してしまった。

当座の生活は、二か村上流の直川がわ村の母の生家の蔵だった。自分は役にも立たないのに、毎日焼け跡の片付けをする家族の所に行った。母と姉は、焼け跡に茫然と立ちすくみ「あそこに〇〇があった」「ここに××を置いていた」と泣いていた。父は「シンガポールで買った金時計は…」と瓦礫がれきと格闘かくとうしていた。「み・ち」十七号に「和歌山空襲」を掲載)

六歳の私は、「片付けの邪魔になる」と直川に帰された。真夏の太陽がジリジリと照りつける午後